

五成隨筆

三

卷之三

年々隨筆

			二〇七九八	和書門
四九〇八	冊架函號類			

二二九	二〇七九八	和書
冊架函號類		

漫筆雜考八

內閣文庫	
番號	和 20798
冊數	4 (3)
函號	212 92



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

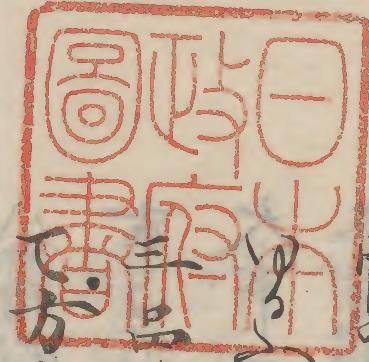


© Kodak, 2007 TM: Kodak



隨筆 壬戌三

淺草文庫



官とてあつてもいふはつらつらありともさじ。皇綱の
 一もあつてふりきりて本朝文粹よめ分る官
 の異見三箇條の中よ。請停賣官事とて一條あり
 今授任之道非不正。黜陟之規非不明。然時有
 以財官又矣。公家以為助國用。衆庶以為輕天工。云々
 とていふ。いふは官とていふはつらつらあり
 類聚三代格。云々。昌泰四年格。播磨國解。毎調
 庸租。稅國之大事也。此國百姓。過半是六衛府舍人。
 初。府縣出國以後。口封宿御。不倫課役。領作田疇。人

仁成道三

延元二年の格よ河内三河但馬等國解備此國久美流
 幣□多困窮就中頗有資産可堪後事之輩既帶
 諸衛府舍人多府舍人の多かりきハ賣れら故たりん
 中より下の法國受領の改作より之庄園多くをりて
 公田減し調庸租税より少くなりて成功とす
 事よりきこり成功と造宣造寺何れもあれ徳野
 大車の公用より私物モウとしてその中と成し功を
 立す官とや事なり本朝文粹より大江迄御新下の
 兵衛守とや中状ふる匡衡為尾張守之時撫民治

自致合期之勤有功無過之由諸卿僉議已畢又依
 官符宣旨修造國分二寺神社諸定額寺十二箇
 所不申請官物別進造伊勢豐受宮之料米五百斛
 造宣陽殿料准額十餘万束依官符宣旨蔵人所召
 所交易進捐二百餘疋等不奉用公帳皆是諸國吏
 之誇功称雄之事也何れなく土木の功とす此事は
 一めと交帳を何れなく土木の功とす物とす
 物とす川川と云てはあわて熟國温職カクと云ひた
 川川きよせり也なりと用度奉とて之れ造宣日よ
 遷シカて多くなりしをば一分二分のも

一余二をともといひたり。つらなるのまよふとふり。ナリ上茶
ト云者アリケリ。此ハ丹波守平貞盛ト云ケル兵ノ
弟ニ武蔵権守重成ト云カ子。上総守兼忠カ太郎也。
ツレノ曾祖伯父貞盛カ甥并甥子ナトシメミナ取集
メテ養子ニシケルニ此維茂甥子ナルニ。然中ニ七年
若カリケレハ十五郎ニ立テ養子ニシケレハ字ヲ餘五
君トハ云ケル也とあり。真田子一誠利子一をとも子也
といふ。これ必しも十餘子とていはず。余五の字
を子細ありや。これ必ずしも。余五の字

は兄とて五郎ハ者なることいひあはれ。この子一も。業行
の分れ。つらなるもあはれ。成功し。上條といふ。こゝ
おとろして。四府の尉諸司の三分よきありて。その官名
をたのむ。こゝくして。その族くよ。太郎二郎を。徳と
ありて。他氏他族。と。赤と。いへども。は。わ。を。り。も。何。り。よ。
つらても。ま。き。こ。ハ。き。故。その。上。の。姓。の。一。り。を。
きて。後。た。る。源。二。了。清。を。宗。宗。宗。と。や。り。よ。名。
を。あ。り。と。け。の。名。ハ。の。あ。な。り。け。て。も。お。お。
を。一。名。多。る。や。り。よ。君。所。の。比。名。を。と。て。よ。新。比。
月。す。び。後。太。所。ハ。新。比。名。太。山。田。よ。を。源。二。了。ハ。山。

三三三

三

高直をいふるを察り。高直源杜少府をいふるは官名
として所の名としていふべきと唐人の名はるは雅と
いふと世に俗をいふやまやと所の漢文をいふ
。林呼の妻をいふやまやと世に俗をいふやまやと
との俗名を成功のをいふやまやと世に俗をいふやまやと

丞允の外は爵としていふはしていふて今昔物語よ田舎
人宗爵としていふはしていふて河原院をいふて女と
鬼よいふはしていふはしていふて今昔大入をいふはして
源波をいふ。又諸寮の次官としていふはしていふて
人としていふ。某進は京職修明大膳の判官某内は内舎人

らるるは除書よきことの内舎人としていふはしていふて
よて源内は源内を某としていふはしていふていふはして
きて源内源内とけいふはしていふはしていふはしていふ
功のきいふはしていふはしていふはしていふはしていふ
原平三をいふはしていふはしていふはしていふはしていふ
くは轉訛をいふはしていふはしていふはしていふはしていふ
土岐千は源人をいふはしていふはしていふはしていふはして
某昔は礼世をいふはしていふはしていふはしていふはして
好まむとて杜撰よきこと源は杜撰をいふはしていふはして
まねつとていふはしていふはしていふはしていふはしていふ

江戸人の名をいふに、つねに「をほき」又「彌祐」をいふ
 人をいふ事ありき。阿細根住をいふ事あり。人の名をいふに、
 事いふは、あはれなくして、いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 いふ事あり。中書王儀同三司をいふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 といふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 事いふは、いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 夕方の事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 二條の東院をいふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。

から下。いふ事あり。君大學の元をいふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 字もつぎあり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 そろきて、いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 ね、いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 字ハ、いふ事あり。皇國のいふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 琳をいふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 志、いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 らす、いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。
 といふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。いふ事あり。

陪臣長吏商人をばねくしきとて院号
 としお贈ふことあるとらうらわある學者と天子
 を替はることもいふしうわらう事よりふもきこゆ
 何心なき者もこれときくはるてがこきまよ
 りもふしゆくも耳をれをての世の風俗をれん
 心をしても家人をれをけら事なりまきこに櫻なる
 事なうらうれん天子を某院^{ナニ}とやまらうとこまねらふ
 めるすもとより^{コト}英事^{コト}今らうくを弁せむ
 院といふ文字は四方ついで隣つきの家^{ナニ}
 別よ一接なるまといふ中和院^{ナニ}共言院^{ナニ}勸學院^{ナニ}學館院^{ナニ}

をその院皆しるを施業院を便なき病人とて齋
 してめらるる不悲田院を公負しき老人をとて養
 ひてめらるる不なれん院といふかりし必しもきくね事いち
 ろし獄令よ流徒罪君作者云々毎旬給假一日
 不得出所役之院とあるハ罪人をこく不といふ院といふ
 こと逃亡の用こよづ流をともわらうて一かき人なる不
 よらめ並なりはれを世稱ら家の別院といふ院といふ
 花山院河原院とやうよ一かき人なる不なれん下れ
 里第子院といふりきれれこて陽成院朱雀院
 冷泉院亭子院をとりしとてまよ公家の別業とて

とをわたり、その中より古くは青島の方多しりはると、二百百
 年とのこと、院号をおくならして、二百年あをい中とて、
 かねて号りしれは、あつしと、今もあつて院号は、
 事なり、上件の差別ありて、天子の院号は、別院よりお
 こは、いふ、大なる比谷とて、外なる事、凡人のいふ、院
 号、あつて、いふ、すて、佛塔をいふ、は、事なり、今、非
 も、く、物なる、は、は、ゆ、う、授、事、と、その、か、り、く、は、
 幣物をいふ、なる、なり、中、と、後、き、く、を、き、き、き、き、
 も、あ、り、て、化、質、え、ま、は、り、き、ま、ら、ふ、商、人、農、夫、す、ま、い、佛、優
 ま、す、も、ま、ち、方、の、沙、汰、の、お、く、は、い、ね、お、く、と、い、は、号、と、授、か

い、き、う、り、な、り、う、り、な、り、な、り、な、り、な、り、な、り、な、り、
 の、未、す、じ、げ、り、り、を、き、い、る、も、例、の、世、号、授、か、よ、佛、塔
 は、い、ま、く、り、な、り、い、松、栢、を、い、ふ、福、壽、を、い、ふ、い、り、き、
 こ、い、て、つ、く、る、な、り、を、と、なる、事、い、ふ、げ、り、り、な、り、
 上、と、い、つ、き、い、る、人、も、い、は、り、は、い、は、り、事、な、り、
 ね、ふ、り、あ、り、は、れ、い、き、い、る、へ、き、人、も、贈、ら、ん、
 へ、き、事、な、り、と、何、い、り、の、人、よ、り、と、き、は、り、は、限、と、立、へ、き
 中、い、る、な、り、は、り、い、る、の、限、な、り、と、い、い、く、上、を
 中、い、る、人、情、と、下、り、い、る、な、り、と、い、い、く、上、を
 かな、き、お、の、跡、か、り、め、の、も、試、よ、し、を、い、い、く、
 郷

殿上人地下も、おむかひつゝ、まゝに人々、まゝに
 たりし、はらひもいふ、はらひに、はらひといふ、ん、大なる、端、
 籙本、殿も、三千石、あり、つゝ、およ、の人、お、小、寺、い、
 主、地、も、費、も、さ、こ、お、る、事、な、ら、ん、寺、の、建、す、も、ま、
 して、難、か、し、又、祿、い、す、も、諸、大、夫、と、わ、る、人、の、
 中、に、お、り、し、ま、ら、し、は、ら、ぬ、籙、本、元、も、お、り、す、ま、
 の、り、と、る、そ、の、雜、費、を、堪、え、ら、ん、寺、の、
 地、も、い、へ、な、お、ら、し、ら、し、又、土、地、を、
 地、の、り、と、る、籙、本、元、と、い、は、ら、ぬ、籙、
 准、擬、と、し、て、い、は、ら、ぬ、外、に、
 諸、家、の、陪、長、も、地、を、

といふ、志、け、し、く、は、て、も、あ、り、ぬ、
 此、家、人、元、と、い、は、ら、ぬ、
 其、陪、長、い、は、ら、ぬ、
 其、あ、り、も、す、人、の、
 其、ま、ま、な、り、今、ま、
 今、寺、の、建、す、も、
 号、は、ら、ぬ、籙、
 其、め、く、
 一、區、
 其、ま、ま、
 其、ま、ま、

其、ま、ま、
 其、ま、ま、

其、ま、ま、

其、ま、ま、

性もよく有りしを中よこにけりばるべき死紅葉
 よつててもはあくのちささありて歌物流も常多う
 ぶをらひ物の本もあはれふかんとてとほく物も
 こえはあふけれしうらひも人の情をなすもの
 羊の養のこめ子國とらるはせしこい少く舟もく
 うもき物とてて何某招くはすしめくやとま
 けりいからしよ

魚ハ何より鯛より。神代紀は赤女比有口疾云々。
 注。赤女鯛真名也。一書云。赤女有口疾不來亦曰
 口女有口疾。即急召至探其口者。所失之針鉤立得。

於是海神制曰。你自今以後不得預天孫之饌。即以
 口女真所以不進御者。此其縁也。とあり世一書
 の丈も口女う赤女うてふ。一書云。又の一書は
 赤女とと赤鯛とと鯛女ととあり。又古事記は海赤
 鯛真とありて。本居先生の説は。仲哀紀は海鯛真を
 といふ。あるを援て。鯛のりをりあり。日本紀
 のみとて。山へいひの事とて。これに。海鯛よとて
 まつね。わわん。かう。さう。い。ま。き。の。ら。じ。
 き。あ。り。わ。り。ま。り。と。い。は。れ。し。と。元。服。の。理。髪。の。大。臣。干。鯛
 を。も。あ。り。と。い。は。ね。ふ。ま。か。き。く。う。く。い。

鱒の末更も又玉し赤えの赤き仙臺あり多々油

土人これにカウカイとありこれ意えしそれは對て

赤えといふ事へいれむひとあり存もきとて尾張

藤原三河國者一万余とてはや意えといふあり

ふもありやとんはありといふも多々ありや

これのカウカイの事なり

論語の我不復夢見周公とあり周公周のとき

人といふ事孔子之後復無孔子の孔子とおへ

孔子礼樂の事いれふ事といふことなきおへて周

公のとき人といふ礼樂再るも人きよといれ

まはしやうとあり人か夢もよんすとのまはし復の字

復を孔子のまとい同し然るを若かりはしむ

公をいふこといふ事いふ氣力喜へてまはすとの

いふと説めると人情よくいふげいひの路とえ

らけりて述懐りきふとて聖人の活路あり

いふは顔之氣力喜へてむいふとて復もいふ

けりていふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ

と聞るものいふ事いふ事いふ事いふ事いふ

その人論語人を教むらひきて義代の規範を

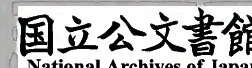
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ

論語をげりなきまゝに見たりしは、
の志をなさんや。

子夏、孝と云ひ、何れ孔子の云ふ、
其勞有酒食先生饌、曾是以為孝乎、
の云へる、色々
好まざる、
いそぎ、
そと、
包とらひ、
親を孝あるふか、

包も、
の、
らぬ死を、
す、
そ、
そ、
そ、

のいき、
そ、
そ、



真惡不食とわしお照し思ひたりしあひをいふ
 しりき難くもいふおれふよのふれをいふ事わ
 したまわし文一をみゆ所をえたる事このい
 をみ路り可あやしたるしを流めふ路ともあ
 一しき人のその財ぶあやまたりしは言を千載の
 ねとくかしてたまふは士とたひん女一わんるのさ
 かりたり。

あふ衣世にあらまかみりてのいふ事いふこと
 其川の流位もとりや五つ入るのいふ事いふ事
 うきつておとさしきもあひたりていふ事いふ事

まのひりたり念ひし事わたりし事いふ事いふ事
 めいしき事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
 こわふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
 物はいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
 いそかへはんそそそそそそそそそそそそそそ
 長んし行かるとらみりて人教をいふ事いふ事
 らんし行かるとらみりて人教をいふ事いふ事
 あまのあてはしおめひく事いふ事いふ事何と
 きう世の中あらしき事いふ事いふ事いふ事
 本所のあまう。忘せぬ身も佳吉を岸舟をいふ事

全史四卷三

十九七

あふ長はくはいと本の甲しとせひつてふれな
しあやもあまもははの家をそと里の名を
し情をわすれあはれがまはれとあむく
つらまはしとあまもあはれ

ねんかたもあまもははの家をそと里の名を
し情をわすれあはれがまはれとあむく
つらまはしとあまもあはれ
あまもあはれがまはれとあむく
つらまはしとあまもあはれ
あまもあはれがまはれとあむく
つらまはしとあまもあはれ

あまもあはれがまはれとあむく
つらまはしとあまもあはれ
あまもあはれがまはれとあむく
つらまはしとあまもあはれ

あまもあはれがまはれとあむく
つらまはしとあまもあはれ
あまもあはれがまはれとあむく
つらまはしとあまもあはれ

あまもあはれがまはれとあむく
つらまはしとあまもあはれ
あまもあはれがまはれとあむく
つらまはしとあまもあはれ

あつては人びとに... 付根とやいふあつて...
あつては人びとに... 付根とやいふあつて...
あつては人びとに... 付根とやいふあつて...

あつては人びとに... 付根とやいふあつて...
あつては人びとに... 付根とやいふあつて...
あつては人びとに... 付根とやいふあつて...

あつては人びとに... 付根とやいふあつて...
あつては人びとに... 付根とやいふあつて...
あつては人びとに... 付根とやいふあつて...

あつては人びとに... 付根とやいふあつて...

あつては人びとに... 付根とやいふあつて...
あつては人びとに... 付根とやいふあつて...
あつては人びとに... 付根とやいふあつて...

百寮ハ百座手井として座と百くしりも交といふ事之の座
 ハ百官の参入して事とゆふたをたま流しも百官の座
 と交事しといふもそのれを百と百官の百の字とこ
 交ハ用の終としてたと交事といふれを統はるといふ
 百官のしと百座と交事といふもけりしひてはきこ
 ゆる物よわは次はれといひてゆふ事の終ハ同しき
 を交沖と潤をといふれを彼とて雄畧天皇けり教上
 百敷の大官といふ事ふふ彼はすてハ百官れりとい
 してといふ事ふその孝徳天皇れり附けりめてハ省百
 官といふれりといふ日本紀の文よからりてすつたは

代りとの制度の改りといふ漢様の官く改始と
 是といふ事しり一皇よりはきよ官くををりて
 勢も世々の改非人々執りてきこりていふとせむ
 大正隆大は長もは自てりてかひいおとやせん其の
 つる百官はわりてそのもりてりていふも大官く
 せりりてりて事何の子細わらひはれり雄畧天皇
 いたけりまを神武天皇の御がよきとすて妨は
 けりてみりてれ流く矣沖はかりきを崇神天皇磯城
 瑞籙宮六十八年までつてきこりていふくめてこりて
 は世をれり百交といふをりてりて百事世とをり

ね取れりしとて合根の義とて流され根りし根をす。

一洗は土生金の義 山明井ふよあつ玉ハ璞いけしこくけり玉

こぞを砥とてこくけり故也いづらあらねハ鑛いけし銀

けり金との鑑もてきこふ故つれとてあらねハさき流し

あつしやあつねと今やばめをんねニツツいづら

はまももろおろろねをてとてらねしはれとてら

れとてんふろとてへし分はりしけ義を執するよあつすあ

つしとていし人ふぬ流しとていしを捨てるもあつむの

と羊の花河あつねの玉の花河けふよ用す羊をき河ふ

れとていづらとてすくもあつしとていづらとて河のた

そはらんとすか人他たつしけらしけらしけら

ていづらとていづらとていづらとていづらとていづら

よあつとていづらとていづらとていづらとていづら

あつとていづらとていづらとていづらとていづら

あつとていづらとていづらとていづらとていづら

あつとていづらとていづらとていづらとていづら

あつとていづらとていづらとていづらとていづら

あつとていづらとていづらとていづらとていづら

あつとていづらとていづらとていづらとていづら

古事記云建内宿祢命率其太子為將禱而經歷於海及
 若狹國之時於高志前之角鹿造假宮而坐爾坐其地伊
 奢沙和氣大神之命見於夜夢云以吾名欲易御子之御
 名爾言禱而白之恐隨命易奉亦其神詔明日之日應奉
 於濱獻易名之幣故其且幸行于濱之時毀鼻入鹿與既
 依一浦於是御子令白于神云我給御食之與故亦稱其
 御名歸御氣津大神故于今謂氣比大神也亦其入鹿與
 之鼻血與故号其處謂血浦今謂都奴賀也とある入鹿
 けは入鹿と云々いふにぬ之新撰字鏡は鮪字といふことあり
 々よこれと云ひすうらけ類とて肉のこ赤くまといひて下

水之流るる小家を志まわすなりてわきま小治家の小女を
 下すれりゆめ之鼻や尻と云ふはく人追風遠志云々
 指名人の幣とて天石食の與とてまつる方々人々を
 すうりかきしるわくきよ地の名よみふらり真うりはる
 入鹿とて一缺らゆら多神のほんか人測るまきのふあり
 信少納言執事ふいづらひ書かぬうまきおひふくあり
 のききいわねん流とと浦と人たひあいそめすも免
 み流はけとていそきいほけりりハ方しくげりわら流て
 息のこあへくまふらりて口くれる物つな湯あき
 流のまきやちりふ折も鉢のいし鮮ききおの申とてね

中家とぼわえて焼てばんのはいーおきんといしと
 わして二三杯くふんふかたのはいん方々し屋の持
 とよくいひてい涼き凡のけくまうおおと七密の
 樹る味飲食すれわりのいし焼く。こころか。
 松々々。 ワチオチオチ 大根。 ナ ね。

享和二年十二月五日降白既今姑谷業ノ春天垂帷於其川在
 園偶有白波寒心之患秋日鳴鐸お市谷野居難念紅花撲
 面之煩未達君平卜居之意や似孟母擇隣之所為者欤

石原 茂久 山 西明

(Faint bleed-through text from the reverse side)

